

世界一周徒歩旅行 スティヴン・ニューマン その2 完

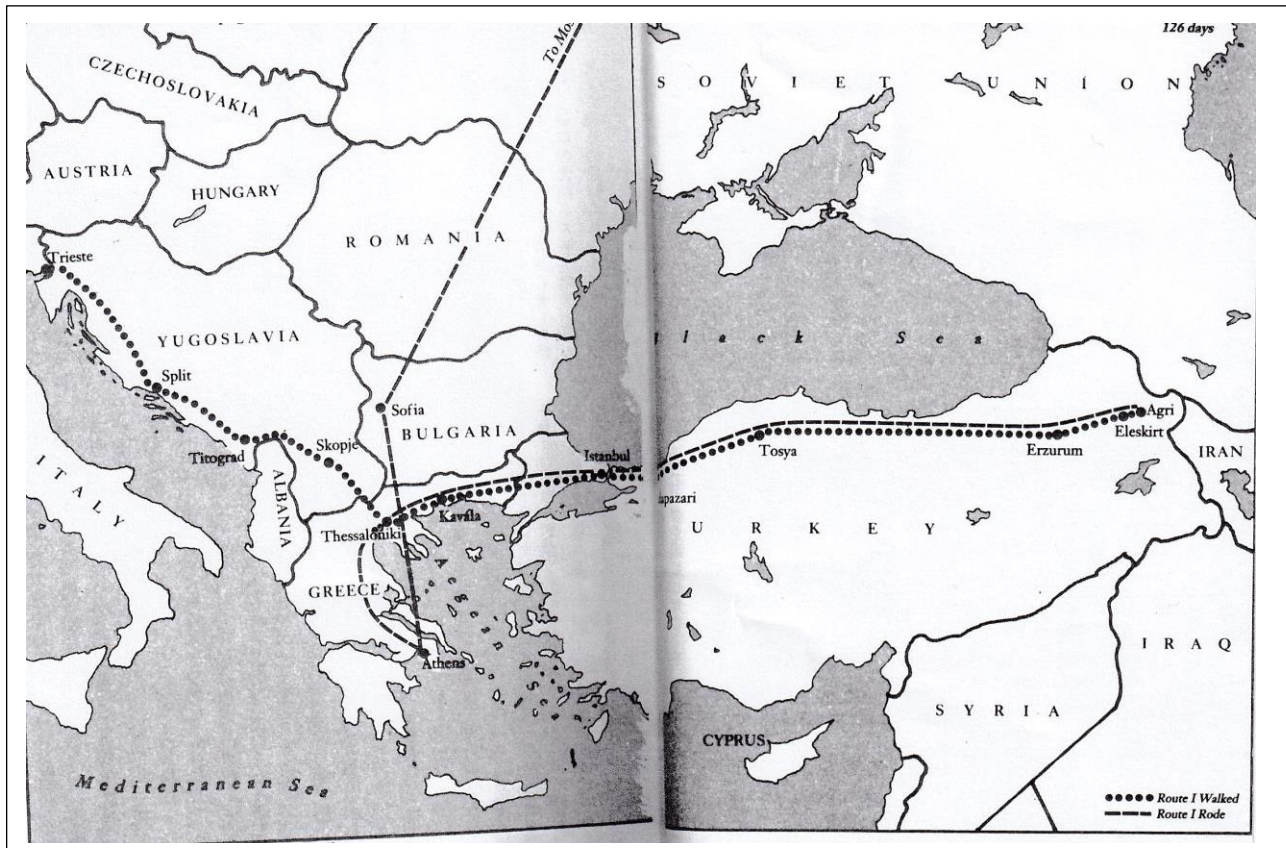
5大陸、20ヵ国 24,000 km以上、単独旅行 ギネスブックにも収録

八柳 修之

ユーゴスラヴィア～ギリシャ～トルコ

1984年6月9日～10月12日 125日 3,606 km 累計2,533日 12,340 km

トリエステ～スピリト～チトグラート～スコピエ～テッサロニキ～カヴァラ～イスタンブール～トスヤ～エルズルム～エレシュキルト～アグリ（イラン国境）



筆者が訪れた当時のユーゴスラヴィアは軍人と農民の国であった。ユーゴの国民は2年間兵役の義務、徴兵制度がしかれ、商店はなく買い物は共同組合。反米意識が強く各地でひどい目にあった。歩いている所は軍事施設の近くだと言われ各地で官憲に取り調べを受けた。「ユーゴでは一人ひとりが警官なんです」言われた。しかし「田舎の人は親切だ」という思いはユーゴでもやはり証明された。

1980年 ユーゴスラヴィアの指導者、チトー大統領が死去し、スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ、コソボ、マケドニアに分離独立した。



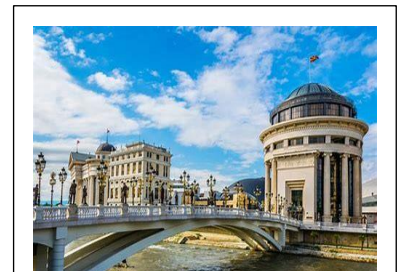
スピリト

現クロアチア、アドリア海沿岸の
小さな町、人口 18 万人



チトグラート（旧名）

現、ポトゴリツァー
モンテネグロの首都 人口 15 万人



スコピエ（現在：マケドニア）

現、マケドニア首都 人口 54 万人
周囲は山で囲まれている。



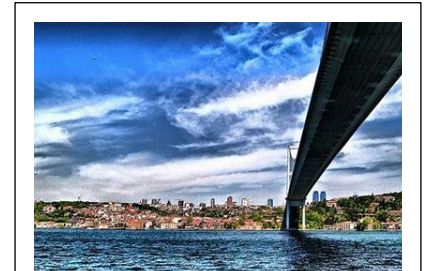
ギリシャ：テッサロニキ

ギリシャ第 2 の都市、人口 100 万人
エーゲ海に面し風光明媚



カヴァラ

東マケドニアを代表する都市
人口：6 万人



イスタンブール

言わずと知れた東西の接点
トルコ最大の都市。人口 1300 万人
東西を結ぶ大橋は IHI の設計・管理

7 月 21 日、西洋文明の発祥の地といわれるギリシャに入る。8 月 2 日、ギリシャ北東部の海岸線にあるリゾート地カヴァラに入る。サーカス・シーズンでロンドンサーカスを観に行き団員と懇意になった。ギリシャの記述はこれだけ。

トルコ

1984 年 8 月 11 日、メリーチ川に架かる橋を渡ってトルコに入る。最初に温かく迎え入れてくれたのはジブシー夫婦。手押し車（クリンガー）に星条旗をつけて歩いた。子供たちが寄ってくる中で、世界を歩いて回っている人があると聞いて来たという医師（25 歳）が子供達の質問を通訳してくれた。誰かが「風呂や洗濯するのはどうするの」と質問した。「大抵は川を渡るついでに風呂も洗濯もすませる」と説明したとたんになんかというどよめきが起きた。「トルコの風呂に入ったことがあるか」「NO」。ではと、トルコで一番古い風呂に連れて行かれた。その夜、医師の家に泊まったが、奨学金の返済を終えたらアメリカへ行って見たいと言った。

ボスプラス海峡沿いに築かれたイスタンブールは、目を奪うばかりの建築様式のコントラストを見せてくれた。イスタンブールに入って、がっかりすることがあった。トルコに隣接するイランに出国するには、アメリカ人は身元調査のため 8 週間要し、たとえビザ取れても車で横断するのみであるという。かくして、徒歩旅行の連続は途切れることになった。仕方がなくイラン国境の**アグリ**まで歩きアテネまで戻り、飛行機でモスクワ経由パキスタンのペシャワールまで飛び、パキスタン、インドへの旅を続けることにした。トルコに入って 2 週間、歩いた距離は 536 km（旧東海道日本橋～大阪間 539 km）に達した。この間、中北部の村で大歓待を受けた。ムスリにとって他人に親切にすることは大切なことであった。しかしイラン国境に近づくに連れて山賊が横行すると聞いてエレシュキルトという軍事基地の町で 1600 km に及ぶトルコ縦断の記録を自宅に送ることにした。だが、山賊以前に秘密警察に拘束された。スパイ容疑、今までもない厳しい取り調べの後、釈放されたが、警護するという名目で武装警官がついて来た。夜同士歩きイランとの国境のアグリに着いた。トルコに入ってから 55 日だった。

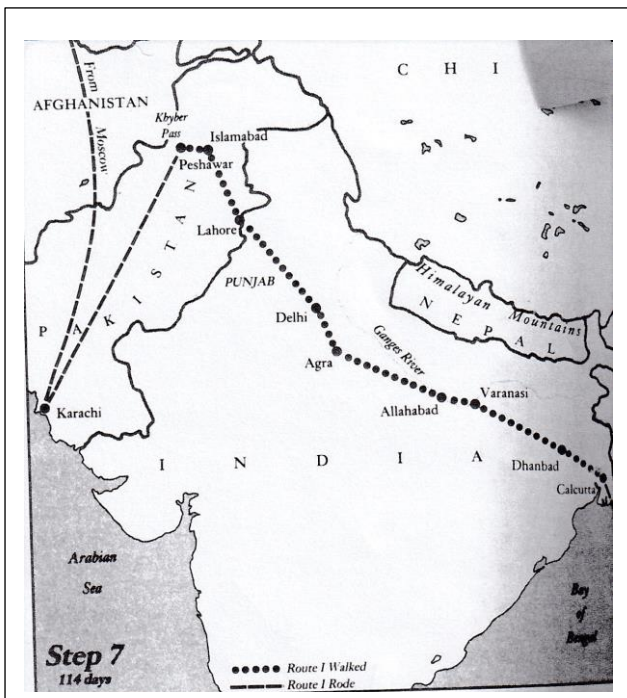


←アグリはイランとの国境の小さな町、海拔 1800m。住民はクルド人。夏は暑く 40 度にもなるが冬季もマイナス 40 度にもなる。密輸が多く、軍隊が駐留する。

エルズルム 人口 36 万人 ウィンタースポーツが盛ん。地図上のトスヤは不明

パキスタン・インド

1984 年 11 月 2 日～1985 年 2 月 23 日 2,155 km 113 日 累計 2,646 日 14,495km



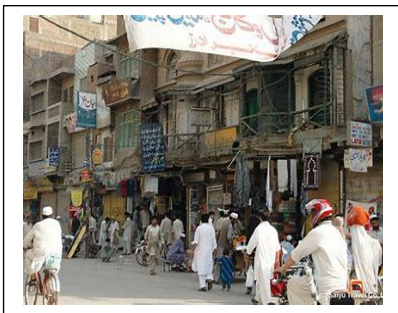
モスクワ（空路）・・・カラチ…ペシャワール～ラホール～パンジャブ～デリー～アグラ～アルハバード～ヴァラナシ～ダーンバード～カルカッタ

イランとの国境アグリからイスタンブールまではヒッチハイクした。大部分はイランから戻るトラックに便乗させてもらった。イランに輸送する荷物は、タイヤ、電線、ディーゼルエンジンの部品、金属板など、日本から輸入されたものという。イスタンブールからアテネの空港まではタクシーを使いソ連のアエロフロートでモスクワ経由カラチまで飛んだ。（航空賃 300 ドル）

パキスタン

パキスタンの首都カラチで過ごした 3 日間は、これまで経験したこともない喧噪を目にすることになった。ぼろを

まとった人、人、裸足、乞食、そこはさながら人類がコントロールの力を完全に失った社会のようだった。パキスタンは大勢の人から徒歩旅行は危険だと厳しく警告された土地だった。ワシントンのパキスタン大使館からも「歩く。とんでもない。絶対に殺される。列車かバスに乗らなやだめです」と。そこで、パキスタン北部、アフガニスタンとの国境地帯に車で向かい、有名なカイバル峠近くのパシャワールからイスラマバード、ラホールに向かうことにした。



ペシャワール

アフガニスタンとの国境カイバル峠まで西 50 km、アフガンからの難民が多く居住する。



イスラマバード

1954 年、パキスタン首府カラチから移転した人工都市、人口 741 万人。



ラホール

インドの交際都市。人口 1035 万人 ムガル帝国の首都であった。写真は大ホール大学

ペシャワールからインドのカルカッタまでの道は紀元前 14 世紀、ロイヤル・ルートと呼ばれていた。イスラムバードから東、五河地方と呼ばれる肥沃な地帯、だが、見たものは物乞いする人、警察官や役人の目に余る腐敗、ゴミ収集、下水設備といった生活の基本にかかる行政の欠如、一夫多妻を認める制度、差別を認めるカースト制度、一族の土地保有権を維持するための近親婚、すべて不可解だった。規制なき汚染、動物の死体、人間や食物に群がる何百万というハエ、そんなものを見ているうちに、自分の健康がひどく心配になり悪夢さえ見るようになった。この国の非識字率は 70%、半分以上は軍事費という。ラホールで、インドへの入国が一週間も待たされた。その上、陸路旅行者に国境が開かれるのは月に 3 日だけだった。すでに、13,790 km、14 カ国を踏破したが、私の幸運はいつ果てるのだろうか。

インド：

インドに入って、どの国の人々にも増して、自然に依存して暮らしていることを悟った。ここでは何一つ無駄にされていなかった。森の木には枯れたままに放置されている枝は一本もなかった。乾かして燃料にするという牛の糞はそのまま放置されることはなかった。描いていたインドのイメージとは随分違っていった。牛の首につけられた鐘の音色、荷車のきしむ音、それが交通騒音のすべてであった。



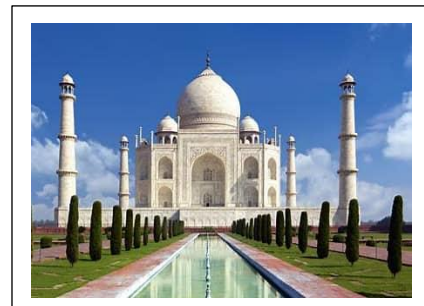
パンジャブ地方

印・パ分離の際、二分された。
稲わら焼きが起因し、PM2.5



デリー

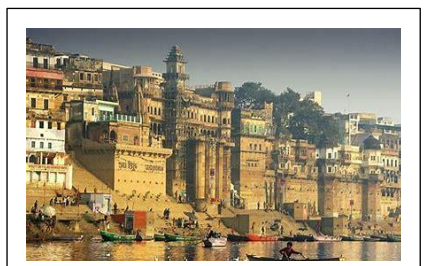
インドの首都、人口 1,700 万人
ニューデリーは新都市地区



アグラ

ニューデリーから車で往復 4 時間
世界遺産 タージマハール

人はよく、インドの旅は宗教的体験の旅というが、確かにそのとおりだ。イスラムの男中心社会ではなく男女が平等に生きているのを見るのは大きな喜びだった。そうした中、クリスマス夜、ニューデリーから母に電話した際、長い闘病の果て父親が亡くなったと知った。タージマハールは、アグラの近郊ヤムナ川のほとりに巨大な真珠のように座っていた。一月の終りに近い旧正月、この一週間の間、実に 200 万を超える人々が聖なる都アラハバードへの巡礼の旅をした。人々はすべてヒンズー教徒でその大半は極貧の人々だった。母なるガンジス河が彼らに魂を呼び寄せたのである。1 月 25 日、アラハバードから 134 km 下流のヴァラナシ（ベレナス）に着いた、



アラハバード

ガンジス河とヤムナ川の合流点
にあるインドの聖地。
アショカ王（BC 3 世紀）の碑がある。



ベレナス

ガンジス河沿いにある人口
120 万人の都市。ヒンズー教の聖地



沐浴風景にびっくり

不潔というしかない。
信仰の恐ろしさを知る。

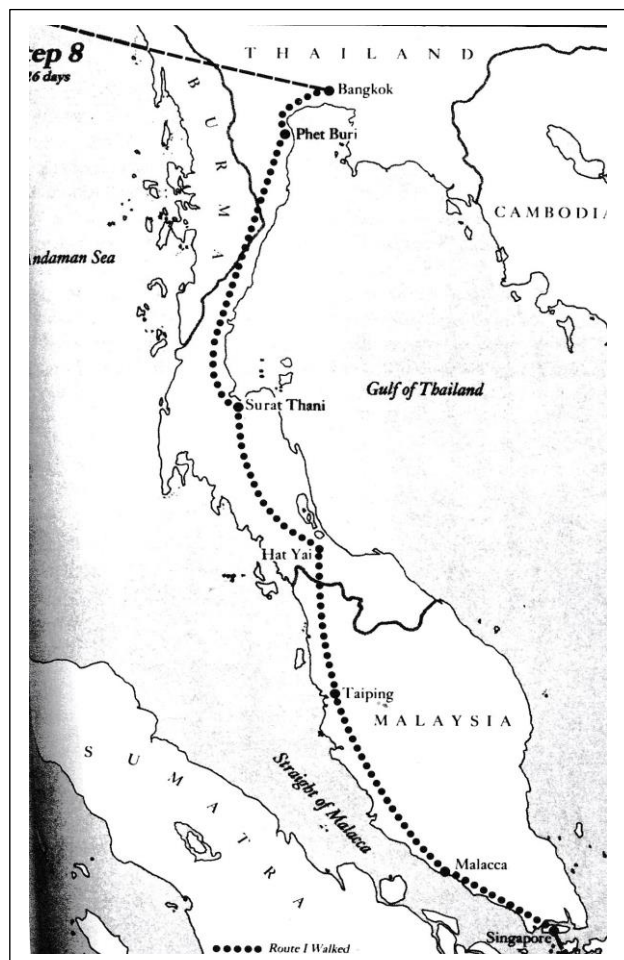
アラハバードは魂を蘇生させる所だが、ヴァラナシ（ベレナス）は死者のための都だった。ヒンズーの信者はここで遺体を荼毘に付され、母なるガンジスに流される。いわばここはヒンズーの人々が自らを森羅万象に回帰させるところなのだ。

1985年2月23日、インド亜大陸横断の全行程わたる2,400km、ロイヤル・ルートを歩き通した。幸い、だった私に出会ったインド人の多くは、一部の警察官をのぞき、マハトマ・ガンジーの哲学を持つ人々だった。

タイ・マレーシア・シンガポール

1985年2月24日～1985年6月29日 1,970 km 126日 累計 2,772日 16,346km

カルカッタ（空路）・・・バンコック～ペトブリー～スラターニ～ハッジャイ～タイピン～マラッカ～シンガポール



タイはこれまでに訪れたインドやイスラム国家の多くと違って、タイ王国は西欧の影響や物質文明の流入を排除しようとはしなかった。それどころか、人々はアメリカ文化のよい面と悪い面をことごとく貪欲に取り込んできた。タイは、私が訪れたヨーロッパの国を別とすれば、最も近代的で効率的で金銭的に豊かな国だった。

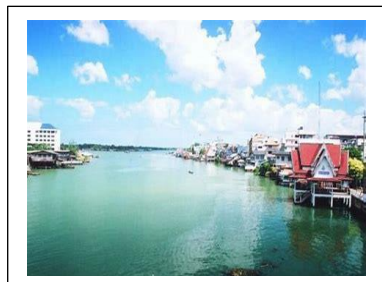


バンコック夜景 人口： 830万人

タイ滞在ヴィサは2週間。一旦、エアコン付き列車でマレーシアへ出国。タイの夏は地獄、4月6日、97km歩いたペトブリーという町でついにダウン。4日間休養。危険だと忠告されたが、夜、歩くことにした。案の定、盗賊に遭い、これまでにない命の危険を体感した。

スラターニ市近くの寺院に2週間以上滞在した。この寺

院の管長は、世界で最も有名な仏教の高僧として知られているとのことで、旅を中断して心身を癒そうと思ったからだ。だが、結局分かったのは、私の心はあまりにも落ち着きがなさすぎる、という事だった。



←スラターニ市

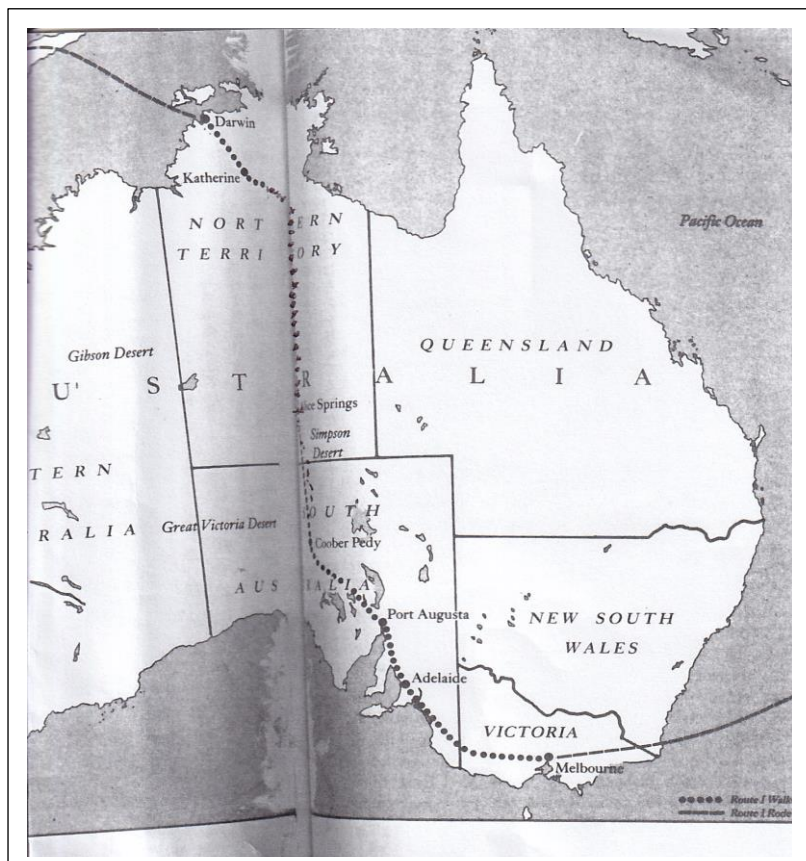
マレーシア北部、ゴムのプランテーションを歩いている中、とあるヒンズー寺院で火渡りの儀式を見た。村人の中でも最も勇気のある人々によって執り行われる贖罪の儀式であった。確かにあの歌や踊りはばかげていて野蛮だし

罪深いほどに原始的であったが、それは生の一部だった。われわれ西洋人には他の人とは違う、誰よりも優れた存在なのだ、という思い上がりを忘れていた。

今、最後の異国の大陸に向けて、シンガポールから飛行機に乗ろうとしている。すでに踏破した距離は 17,700 km になろうとしている。ときは 1985 年 6 月 29 日。ああ、私はなんという運のいい男なのだろう。いま、シンガポールを去るにあたって、村人の中でも最も勇気のある人々によって執り行われる贖罪の儀式であった。

オーストラリア

1985 年 7 月 1 日～1986 年 6 月 20 日 3,738 km 354 日 累計 3,226 日 20,092km



オーストラリア行程：

ダーウィン～アリス・スプリングス～
クーバーペディ～ポートオーガスタ～
アデレード～メルボルン

1985 年 8 月 5 日、ダーウィン発。オーストラリア、北と南の間は 3,500km もの広大な砂浜が広がっている。世界一淋しいハイウェイ「スチュアート・ハイウェイ」は人口の多い南部と、いまだにその大半が未開発の北部とを結ぶ、ただ一つに生命線である。町と呼べるほどの集落（人口 2,000 人以上）は、わずかに 3 つ。しかも都市は、ダーウィンから南へ 1,770 km のアリス・スプリングス（人口 2 万人弱）だけである。たとえ、アリス・スプリングスに着くまでに渴きで死ななかったとしても、淋しさのせいで死んでしまうかもしれない。歩く予定の北部地方の 1,900 km

のうち、1,600 km は赤道と南回帰線に挟まれた炎熱と半乾燥地帯、残り 300 km は、巨大な砂丘と粘土質の窪地からなる砂漠で過酷なはずだ。なかでも最も怖しく痛い目を見たのは体長、親指の半分もあるブルドック・アリ、火を怖れないのだ。それよりも恐ろしいのは 140 種類もある毒蛇である。そんな中、金属探知機を持ち、すでに 40 万ドルを稼いだ男にも出遭った。2,000 km 近く歩いて緑美しいアリス・スプリングスのドライブイン、11 日間休養した。ダーウィンまで 1,535 km、アデレードまで 1,648 km という標識があった。



ダーウィン

大陸の北側チモール海に位置する。

人口約 14 万人。約 25% がアボリジニ



アリス・スプリングス

人口：2 万人

町の名前の由来となった湧き水



グレートヴィクトリア砂漠

10月30日、南オーストラリアに入った。そこは今までよりもさらに厳しく、人口に少ないグレートヴィクトリア砂漠である。目に入るものと言えば、トカゲと蛇、グロテスクにくねる灌木、漠とした空間ばかり。灼熱の日中は避けてところ夜に歩くことにした。12月9日、ついに縦断し終え大陸と海とを隔てる、細い海岸線を見下ろすポートオーガスタに着いた。4ヶ月以上かけて悪戦苦闘してきたあの広大な砂漠、それは私が経験した中でも一番厳しいところだった。休養するためメルボルンまで 1080 km。バスを使って移動。私を待ち受けていたのは、約 200 通にも上る封書だった。1月28日、再びポートオーガスタに戻り、再び歩き続けた。地中海気候を思わせるアデレードを過ぎ、3月3日、巨大なユーカリの木が並ぶ二級道路を辿ってオーストラリアで三番目の、そして最後の州となるビクトリア州に入った。季節はいつしか秋に変わった。出来るだけ幹線道路を外れ、鉄道線路や水道用のパイプラインに沿った道を歩いたので、親しくなった人は殆ど農夫だった。食卓に招かれたり、空いたベッドを提供されるなど良い事づくめだった。3月27日、ついにメルボルンに着いた。それは私のオーストラリア大陸縦断の旅の最後を意味するものであった。



ポートオーガスタ

人口 13 千人の町
州都アデレードまで 322 km



アデレード

南オーストラリア州都
人口：120 万人 (2011)

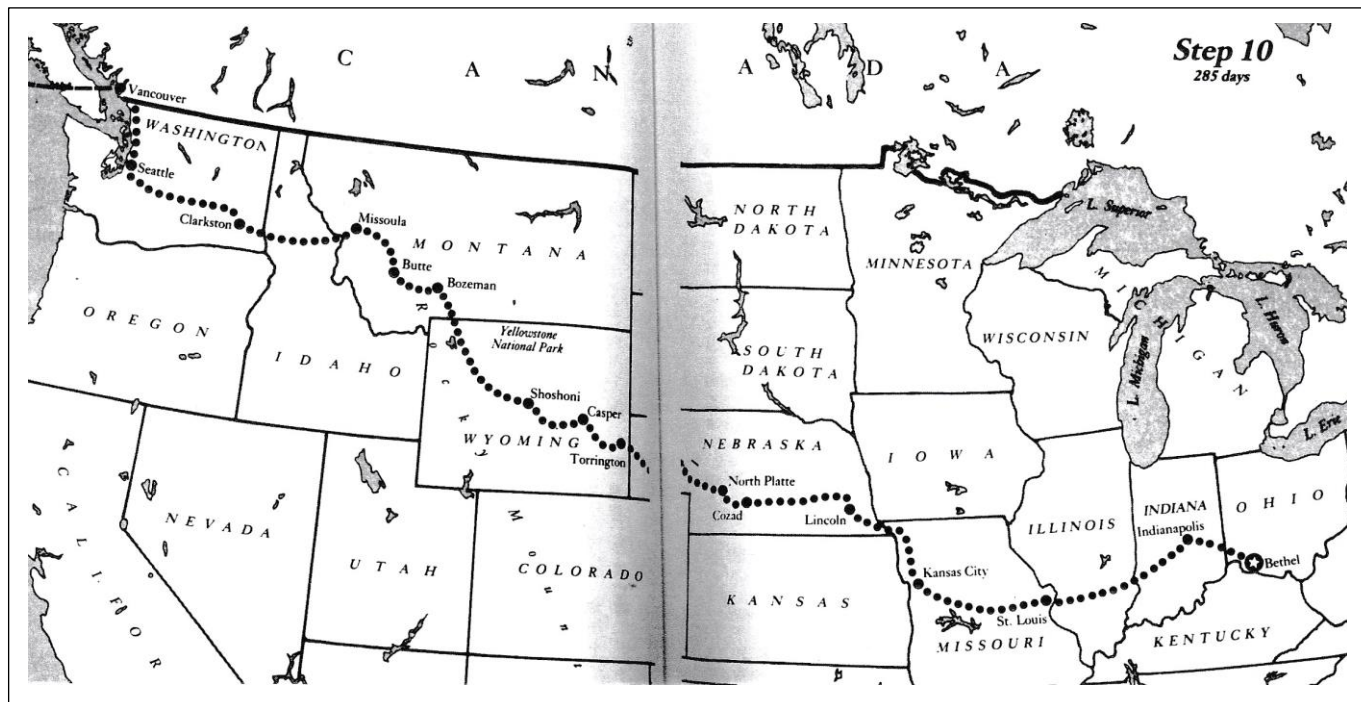


メルボルン

ビクトリア州都 人口：508 万人
世界一住みやすい都市に選定されたことあり

カムバック アメリカ

1986 年 7 月 21 日～1987 年 4 月 1 日 4,378 km 254 日 累計 3,480 日 24,470 km



アメリカ行程： (カナダ) バンクーバー～ (ワシントン州) シアトル～クラークストン～
(モンタナ州) ミズーラ～ビュート～ボーズマン～ (ワイオミング州) イエローストーン国立公園 ショジョニー～カスパー～トリントン～ (ネブラスカ州) ノースプラット～リンカーン～ (ミズリー州)、カンサスシ

ティ〜セントルイス〜（インディアナ州）〜インディアナポリス〜（オハイオ州）ベセル（帰着）

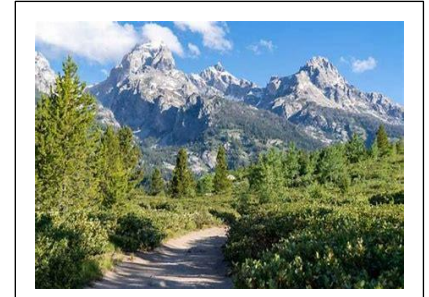
6月29日、バンクーバーとシアトルの間にある国境線上に建つ白い「平和のアーチ」をくぐった。身分を明かすと税関吏達に祝福をされたが、シアトルの町に着くまでの一週間、アメリカ・ブランドの友好というものが、まるで優しくないということも思い知らされた。自動車が普及した社会では、路上で出会って言葉を交わせる人の数は少なかった。町の中で出会う人は、誰もがやたらにせわしげで、一分でも時間をさいてもらうことが、申し訳なかった。群れをなしてつきまといて来る人、何等かの形で私に救いの手を差し伸べることを自分の義務と心得る信仰心厚い人達もいなかった。色々な面で私は今まで世界中の人々に甘やかされてきたのだ。



シアトル 人口74万人



ビュート 人口3万人



グランドティートン山

モンタナ州のビュートは、かつて最も規模の大きな鉱山町のひとつであった。大恐慌時代人口は10万人を超えた。いまでは3万人の町となっていた。そこに4日間、休息をとった。9月の第3週、道を変更してモンタナ州のポーズマンのとある小学校に立ち寄った。メルボルンに滞在しているとき小学3年の女の子から、私の世界徒歩旅行に関する質問がびっしりと書かれた手紙を受け取ったからであった。先生ほか大歓迎されたのは言うまでもなかった。11月、深い雪に埋もれたイエローストーン公園を通り、ワイオミング州の峻険なグランドティートン山を越えた。そのふところに横たわる広大な平原にさしかかったとき、私を取り巻いていたのは物音ひとつない静寂と身の切る冷たい冷氣の世界だった。そして、私が21歳のときウラン鉱探索のため過ごしたショショーニの町（画像なし）に立ち寄った。

・・・そして1987年4月1日、ついに世界一周徒歩での旅、30カ国、24,000 km以上、見果てぬ夢を実現したのだった。凜とした冷気みなぎる美しい朝、故郷のベセルの村長をはじめ何百という人々、私が歩いてきた国々の国旗が飾られるなか、我が家に玄関先まで熱烈な歓迎を受けた。玄関の階段を登り、泣いている母を抱きしめたとき、深い涙がこぼれるばかりだった。私はただ歩いただけだ。だが、人々をはるかに多くのことをした。彼らは私を愛してくれた〜〜〜何度も何度も。だから私が言いたかったのは有難う、世界よ、あなた方の家をわが家としてくれた世界の人々よ、ありがとう、という言葉だった。

ドアの内側で待っていた兄や弟、妹の笑顔を見つめた。妹が腕に抱えた花束から、赤いバラを一本だけ抜き取った。私にはもう一人だけ、私が無事帰り着いたことを報告しなければならぬ人がいたからだ。（完）

1987年、オハイオ州最高の栄誉と言われる知事賞を受け、講演の際に出会った若き小学校教師と結婚した。彼の旅は、1988年度の「ギネスブック」にリストアップされた。初めて単独で世界一周を徒歩でなし遂げたというのが理由だった。

写真はすべて無料画像による。